

# 幼児の被援助についての認識と誤信念理解の関連

おおしま  
大 島 みずき

## 〈要 旨〉

援助を受けた時に、援助者に対して感謝の気持ちや返報したいという気持ちを持つことは大人にとっては大切なことである。では、日常生活の中で援助を受ける機会が多い幼児も成人同様に援助を受けたことに感謝の気持ち、返報への意識を持つのだろうか。また、幼児の援助についての認識は、なぜ生じるようになるのだろうか。本研究では幼児(4歳児)の被援助についての認識(感謝・返報の重要性・返報できないことの不快感)と誤信念課題の理解との関連を検討した。その結果、誤信念課題の正答/誤答による被援助についての認識の得点に差がないことが示され、4歳児では誤信念を正しく理解すること、被援助者に感謝の気持ちを抱くこと、返報を重要であると考え、返報できないことを不快に思うことには関連がないことが示唆された。また、女児においてのみ返報の重要性と語彙年齢に正の相関、返報できないことの不快感と語彙年齢に負の相関が示された。

## 〈キーワード〉

被援助 感謝 返報 心理的負債 誤信念課題 幼児

## 問題と目的

大人は人から助けをもらうと、助けてくれた人や、助けてもらったことに対し感謝の気持ちなどの肯定的な感情を抱く。そして、与えられた援助者に対して返報することを願う。この返報には、人間が持つ、助けてくれた人は助けるべきだ、という互惠規範が関わっている(Gouldner, 1960)。さらに援助を受けることで肯定的な感情だけでなく、返報を相手に対する「借り」(これを心理的負債:Indebtednessという)と捉えることから被援助に対する否定的な感情が生じることも明らかとなっており、この否定的な感情は返報を促進することから、被援助にあたっては肯定的感情・否定的感情の両方が存在することで返報がスムーズに行われていることが考えられている(Greenberg, 1980 など)。

では、助けられることが多い幼児という存在であっても、大人と同様に被援助に対して肯定的・

否定的な感情をいだくのだろうか。

### 被援助時の感謝

助けてもらった相手に対する感謝の気持ちの生起については、成人を対象としてその生起状況や道徳心との関わりなど多くの側面から研究が行われてきた(Barlett, & DeSteno, 2006; 蔵永・樋口, 2012; McCullough, Kilpatrick, Emmons, & Larson, 2001; Tsang, 2007 など)。また、近年ではポジティブ心理学の分野でも感謝はその研究テーマとしてよく取り上げられるようになっている(レビューとして本多, 2007)。

成人の感謝についての研究が進む中で、児童期の感謝の気持ちについては7-10歳前後で感謝の気持ちが生じるとされた(Weiner & Graham, 1988)。日本でも藤原・村上・西村・濱口・櫻井(2013)により研究が行われ、児童期後期の子どもが道具的・情緒的な援助を受けた際に感謝の気持ちを抱くことが明らかになっている。Weiner & Graham(1988)では、5歳児からが調査の対象となり、7歳前後から感謝の気持ちを抱くとしているものの、それ以降の研究で幼児の感謝について検討している研究はまだ少ない。しかし、実際の子どもの様子を見る限りでは、彼らは「ありがとう」という感謝の気持ちを示す言葉を頻繁に使用しているようにも思う。

### 被援助時の返報

援助を受けたことによる返報、そしてその返報意識に伴う心理的負債についても、その研究の対象は成人であることが多く(相川, 1984; Greenberg, 1980; 一言・新谷・松見, 2008 など)、児童・幼児が返報をどのように捉えているのかについての研究は多くはない。DeCooke(1992, 1997)は児童を対象に被援助について検討を行い、返報を重要であると感じる程度と、返報できないことによる不快感情には学年による違いがないことを示した。また、幼児を対象として返報の重要性、返報できないことの不快感情を検討した泉井(2008, 2009)は、幼児が返報を大切であると考える一方で、返報できないことを不快と思いつらいことから、幼児は被援助に対して心理的負債を持たないことを示唆した。

しかし、年長幼児を対象とした泉井(2008, 2009)の調査でも返報できなかったことを「不快である」と回答した幼児も存在している。つまり、被援助・返報の受け止め方には幼児の中でも差があるのではないだろうか。では、返報できないことを不快に思う/思わない幼児では何が異なるのだろうか。大人であっても返報に対する態度には考え方の個人差があるとされている(Eisenberger, Cotterell, & Marvel, 1987)。しかし、もともと心理的負債を持ちづらい幼児期における返報に対する認識の差は、成人のような人格の差ではないのではないか。

被援助に対する感謝も返報も、そこに生じる心理的負債も援助者があってのものである。援助者が善意で行った返報に対して感謝の気持ちが強くなること(Tsang, 2006)、援助コストが高い場合に心理的負債が高くなること(相川, 1988; Greenberg, 1980)が明らかである。このような点から援

助者の援助意図などを考えることができるようになると、つまり、心の理論を獲得することで幼児は被援助に対する認識を変化させるのではないだろうか。

### 心の理論と被援助についての認識

心の理論(theory of mind)とは、Premack & Woodruff(1978)によって、ある個体が、自己及び他者に目的・意図・知識・信念・思考・疑念・推測・ふり・好みなどの直接観察できない心的状態を帰属させることと定義されている。これまでの研究から、心の理論は3歳から5歳にかけて獲得されることが明らかとなっている(Welman, et al., 2001)。このように心の理論の獲得時期に個人差が存在することから、仲間との相互作用における心の理論の有無の影響についても多く研究がなされている。例えば、森野(2005)は3歳児から5歳児を調査し、心の理論が発達している者ほど感情理解課題の正答率が高いことを示している。

心の理論の獲得の発達的变化は「誤信念課題(false-belief task)への正答/誤答により判断できる。誤信念とは、自分の信念とは異なる他者の誤った考えや行動を推測する能力のことである(Wimmer & Perner, 1983)。誤信念課題に正答する幼児であれば、被援助時に援助者の状況や気持ちについて考えることが可能なのではないか。つまり、誤信念課題に正答する幼児は援助者に対する感謝の気持ちを、誤信念課題に正答できない幼児よりも強く感じる事が予測される。さらに、誤信念課題に正答するということは、援助を受けた人と援助者の意思を分け、援助者が援助の代償である返報を受けられないことをどのように思うかについても考えることができるようになっていと考えられる。そのため誤信念課題に正答することができる幼児の返報できないことの不快感は、正答できない幼児よりも高くなるのではないだろうか。しかし、泉井(2008)において、どのような状況であっても幼児が返報を重要であると捉えていることが示されたことから考えると、助けてもらった相手に返報するという事は、幼児にとって規範の一つとして認識されているものでもあるだろう。そのため、その返報の重要性の程度には誤信念課題の正答/誤答は影響していないと予測する。

なお、本調査では、誤信念課題の理解の差による被援助時についての認識への影響を見るため、誤信念課題の理解に差が多いと考えられる4歳児を調査の対象とする。泉井(2008, 2009)では年長児幼児が対象となっていたが、4歳児であっても同様に返報の認識について回答することができるのだろうか。

また、本調査では、誤信念課題との関連が大きいと考えられている言語能力についても(Lohmann & Tomasello, 2003; Milligan, Astington, & Dack, 2007; Markel, Major, & Pelletier, 2013)、被援助についての認識の関連も合わせて検討していく。

以上から、本調査では、幼児期における誤信念課題の正答/誤答が援助者に対する感謝、返報の重要性、返報できないことによる不快感に及ぼす影響を以下3つの仮説から検討する。

仮説1: 誤信念課題に正答できる幼児は援助者への感謝の程度が高い。

仮説 2: 誤信念課題への正答/誤答による返報の重要性の差はない。

仮説 3: 誤信念課題に正答できる幼児は援助者に対して返報できない時の不快感情が高い。

## 方 法

### 調査協力児

神奈川県内の認定こども園に通う年中幼児 30 名(男子 17 名, 女児 13 名; 月齢 $M=57.12$ ,  $SD=3.38$ )

### 調査者

仮説を知らない私立大学の 3 年生 6 名。調査を行う前に手順等の研修を綿密に行った。

### 調査時期

2013 年 8 月上旬

### 調査材料

被援助課題: 幼児が友人から助けてもらう状況についての図版(貸してもらい, 言葉をかけてもらう, 守ってもらい)。被援助時の感謝の程度, 返報の重要性の程度, 未返報による不快の程度をそれぞれ尋ねるため図版。それぞれを男女別に作成した。

スマーティ課題: 空のクレヨンの箱, 誕生日用ろうそく。

言語統制課題: PVT-R 図版(日本文化科学社), 調査用紙, 手引き。

### 調査手順

本調査は泉井(2008)を参考に, 個別面接により行われた。調査場所は認定こども園の会議室( $\times 2$  部屋)と, 絵本スペースの計 3 カ所であり, いずれの部屋も調査協力児が落ち着いて集中できる場所であった。調査者と調査協力児が部屋に入り, 名前や誕生日などを聞きながらラポールを形成した。調査協力児の緊張がほぐれたところで, まずは PVT-R を行った。調査協力児には「これから言葉あてのゲームをします」と教示し, その後, PVT-R の手引きに従い, 例題を実施し, 検査を行った。

次に, 被援助の認識についての質問を行った。調査協力児と同性の主人公となるキャラクターを, キャラクターカードを用いて紹介し, 「今日はこの子のお話をいくつかするよ」と言い, 課題に移行した。主人公が助けてもらう 3 つの被援助場面(鉛筆を貸してもらい, 転んだときに言葉をかけてもらう, 怖いものから守ってもらう)の提示順を事前にランダムになるよう決定した。被援助場面それぞれで, 援助を受けたことについて主人公がどう考えるかについて 3 つの質問(援助者への感謝, 返報の重要性, 未返報の不快感)を順番に行った。

被援助者への感謝: 調査協力児に対して, 課題のような援助を受けた際に主人公が感謝の気持ちを抱くか否かを尋ねた(助けてもらった主人公は, 助けてくれた人に「ありがとう」という気持ちになると思いますか?)。「ありがとうという気持ちになる」と回答した場合, 3 段階の大きさの正方形が

並ぶ図版を示し、感謝の気持ちの程度を選択させた(どのくらいありがとうと思うかな?)。感謝の気持ちは生じないと回答した調査協力児については、感謝の程度についての質問は行わなかった。

返報の重要性：調査協力児に対して、課題のような援助を受けた際に、主人公が返報をすることは重要であるか否かを尋ねた(助けてもらった主人公が、助けてくれた人にお返しをすることは大切なことだと思いますか?)。「大切である」と回答した場合は、感謝質問同様、補足図版を用いて重要性の程度を3段階で回答してもらった。返報は重要ではないと回答した場合は、重要性の程度についての質問は行わなかった。

未返報による不快感情：調査協力児に対して、返報ができないことで主人公が不快になるか否かを尋ねた(主人公は助けてくれた人にお返しができなかったんだって。そんな時、主人公は嫌な気持ちになると思いますか?)。「嫌な気持ちになる」と回答した場合は、上記2題と同様の補足図版を使用して不快感情の程度を3段階で回答してもらった。返報ができなくとも不快ではないと回答した場合には、不快の程度についての質問は行わなかった。

次に誤信念課題として、スマーティ課題を行った。調査協力児にクレヨンの箱を見せ、中に何が入っていると思うのかを尋ねた(1.この中には何が入っていると思う?)。調査協力児が回答し終わったら、箱の蓋を開け、中に入っていることがクレヨンではなく、ろうそくであることを確認した。再びろうそくの入ったクレヨンの箱の蓋を閉め、最初にこの中に何が入っていたかと思っていたかを尋ねた(2.最初、この中には何が入っているかと思っていた?)。そして、他の人に同様の質問をした場合、その人は中に何が入っているか考えるかを尋ねた(3.今、ここにいなかったお友達にこの箱を見せたら、その子は箱の中に何が入っているって思うかな?)。

調査協力児から得られた回答は全て記録用紙に記述した。最後に、今日話した内容は他のお友だちには内緒であることを確認し、保育室へと帰した。

#### 得点化と群分け

- ・語彙月齢：PVT-Rの手引き(上野・名越・小貫, 2008)に従い、調査協力児の月齢と回答から語彙月齢を算出した。
- ・被援助についての認識：感謝の気持ちについては、感謝の気持ちはないとした回答を0点とし、その後3段階で回答してもらった程度を低い方から1点から3点とした。返報の重要性、未返報による不快感情についても同様に得点化を行った。
- ・スマーティ課題：3つの質問全てに正答した調査協力児を誤信念課題正答群とし、2点以下の場合を誤信念課題不正解群とした。

## 結 果

#### 誤信念課題と月齢・語彙月齢

誤信念課題の正答/誤答の性別による内訳を表1に示す。



表 1 誤信念課題正答/不正答の内訳

誤信念課題	男児	女児
正答	8	8
誤答	9	5
合計	17	13

次に、誤信念課題の正答/誤答と性別による月齢・語彙月齢の差を検討するため、月齢、語彙月齢それぞれについて誤信念課題（正答/誤答）、性別（男女）を被験者間要因とする 2 要因分散分析を行った（表 2）。月齢（誤信念課題：正答/誤答： $F(1,26)=1.87$ , n.s. 性別： $F(1,26)=.04$ , n.s. 誤信念課題×性別： $F(1,26)=.13$ , n.s.），語彙月齢（誤信念課題： $F(1,26)=.60$ , n.s. 性別： $F(1,26)=.10$ , n.s. 誤信念課題×性別： $F(1,26)=1.70$ , n.s.）共に有意な主効果及び交互作用は見られなかった。

表 2 誤信念課題と月齢・語彙月齢

誤信念課題	月齢		語彙月齢	
	男児	女児	男児	女児
正答	57.38 (4.14)	57.25 (3.54)	61.88 (11.29)	54.63 (11.22)
誤答	57.00 (2.35)	56.60 (3.71)	52.56 (11.90)	57.00 (14.39)
合計	57.18 (3.21)	57.00 (3.46)	56.94 (12.23)	55.54 (12.00)

( )内はSD

### 被援助についての認識

援助を受けた際の認識について、誤信念課題の正答/誤答と性別による差があるのかを検討するために、被援助時の感謝、返報の重要性、未返報による不快それぞれについて誤信念課題（正答/誤答）、性別（男女）を被験者間要因とする 2 要因の分散分析を行った（表 3）。

表 3 被援助についての認識（0 ～ 3 点）と誤信念課題

誤信念課題	感謝			返報の重要性			未返報による不快		
	男児	女児	合計	男児	女児	合計	男児	女児	合計
正答	2.50 (.50)	2.50 (.59)	2.50 (.53)	2.29 (.49)	2.63 (.38)	2.46 (.45)	1.29 (.84)	1.25 (.90)	1.27 (.85)
誤答	2.19 (.73)	2.67 (.47)	2.36 (.67)	1.92 (1.14)	2.67 (.47)	2.21 (.99)	1.48 (1.16)	1.47 (.87)	1.48 (1.03)
合計	2.33 (.63)	2.56 (.53)	2.43 (.59)	2.10 (.87)	2.64 (.40)	2.34 (.74)	1.39 (.99)	1.33 (.86)	1.37 (.92)

( )内はSD

被援助者への感謝については、有意な主効果及び交互作用は見られなかった(誤信念課題： $F(1,26)=.11$ , n.s. 性別： $F(1,26)=1.15$ , n.s. 誤信念課題×性別： $F(1,26)=1.15$ , n.s.)。返報の重要性については、性別の有意な差がある傾向がみられ( $F(1,26)=4.06$ ,  $p<.10$ )、女兒の得点が男児の得点よりも高かった。誤信念課題による主効果( $F(1,26)=.38$ , n.s.)、及び誤信念課題、性別による交互作用( $F(1,26)=.60$ , n.s.)は見られなかった。未返報による不快感情については、有意な主効果及び交互作用は見られなかった(誤信念課題： $F(1,26)=.31$ , n.s. 性別： $F(1,26)=.01$ , n.s. 誤信念課題×性別： $F(1,26)=.00$ , n.s.)。

被援助時の認識と語彙月齢の関連を調べるため、男女別に被援助についての認識(感謝、返報の重要性、未返報による不快)と語彙年齢の相関を検討した(表4)。その結果、女兒においてのみ返報の重要性と語彙年齢に有意な正の相関がみられ( $r=.55$ ,  $p<.05$ )、未返報による不快と語彙年齢に有意な負の相関がある傾向が見られた( $r=-.52$ ,  $p<.10$ )。男児では、被援助についての認識と語彙年齢の間に有意な相関は見られなかった。

表4 被援助についての認識と語彙年齢の相関

	感謝	返報の重要性	未返報による不快	語彙年齢
感謝		-.06	.16	-.02
返報の重要性	.31		-.08	.02
未返報による不快	.07	-.34		.40
語彙年齢	.20	.55*	-.52+	

上段は男児、下段は女兒

\*:  $p<.05$

+:  $p<.1$

## 考 察

### 誤信念課題と月齢・語彙月齢

本調査では、誤信念課題の正答/誤答による月齢・語彙月齢の差は見られなかった。先行研究から誤信念課題と言語能力には関連があると示されていたにもかかわらず(Lohmann & Tomasello, 2003; Milligan, Astington, & Dack, 2007; Markel, Major, & Pelletier, 2013)、本調査ではその関連は見られなかったことになる。

### 仮説の検証—被援助の認識と誤信念課題の関連—

本調査では、誤信念課題の正答/誤答による被援助への認識の違いについての差は見られなかった。そのため、誤信念課題による差があると考えた援助者への感謝についての仮説1、及び未返報による不快感情についての仮説3は棄却された。返報の重要性については、差が見られ

ないことを仮説としていたため、仮説 2 は支持されたと考えられる。また、被援助についての認識と語彙月齢については女兒のみにはあるが有意な関連が見られ、語彙月齢が高い方が被援助者への感謝の気持ちが強く、また、返報できないことの不快感情が低かった。

では、なぜ感謝の気持ち、返報できないことの不快感情に誤信念課題の正答/誤答による差が見られなかったのだろうか。

第 1 の理由として、感謝・返報の重要性得点の天井効果が挙げられる。被援助者に対する感謝得点 ( $M=2.43, SD=.59$ )、返報の重要性得点 ( $M=2.34, SD=.74$ ) は全体的に高かった。このことから助けてもらった人に「ありがとう」と思う、助けてくれた人に「お返しをしたいと思う」と回答することは幼児にとっては、社会的望ましさから生じる規則のようなものになっていることが考えられる。返報の重要性については、泉井 (2009) から、ルーティンによる回答が予測されたが、「ありがとうという気持ち」についても、その社会的望ましさから、ほとんどが「ありがとうと強く思う」という回答となったのかもしれない。つまり、成人や児童と幼児では感謝の意を表す「ありがとう」は性格が異なっている可能性が考えられる。成人と異なり、語彙が少ない幼児に対して社会的望ましさやルーティンとしての「ありがとう」に影響されない感謝の気持ちを尋ねる方法を、検討していく必要があるだろう。

第 2 に語彙月齢との関係が挙げられる。女兒においてのみではあるが語彙月齢が高い方が、返報の重要性が高く、返報できない時の不快感情が低い傾向が見られた。このことから本調査における被援助のストーリーの内容が語彙月齢が低い 4 歳児には難しかったことが考えられる。本調査における被援助場面の提示方法や、被援助についての認識の質問方法は泉井 (2008) を参考に行ったが、泉井 (2008) における調査対象は年長児 (平均月齢 72.3 ヶ月) であった。そのため、調査協力児がストーリーや質問を十分理解できずに回答してしまった可能性が考えられる。ストーリー、質問内容をより理解している場合の方が、返報できないことの不快感情が低いことについては、泉井 (2009) が指摘する、援助を受けたことを不快に思わないことが、被援助機会が多い幼児にとっては重要であるという示唆と重なるものとなるだろう。しかし、なぜ女兒にのみこの関連が見られたかなど、今後さらに被援助のストーリーを簡単なものにするなどしながら検討していく必要がある。

第 3 に誤信念課題と語彙月齢の間に関連が見られなかったことから本調査において誤信念の理解が正しく測定されていなか可能性が考えられる。本調査では調査協力児の負担を考え、誤信念課題をスマーティ課題 1 題とした。しかし複数の誤信念課題、または心の理論の獲得関わる他の課題を一緒に行うことで、より精緻に被援助についての認識への心の理論の発達の影響を検討できたかもしれない。

## 今後の課題

本調査では、被援助についての認識と誤信念課題の理解との間に関連は示されなかった。心



の理論を獲得する過渡期とも考えられるこの時期に、誤信念課題と被援助の認識の関連を検討することは、その影響の有無を明らかにするだけでなく、幼児にとって助けられることがどのように受け止められているのかを考える上でも重要である。今後は被援助場面のストーリーや誤信念課題など手続きを精査していくことで、4歳という年齢での被援助の認識のメカニズム、そしてその発達について検討していく必要がある。

## 〈引用文献〉

- 1) 相川 充(1984). 援助者に対する被援助者の評価に及ぼす返報の効果. *心理学研究*, **55**, 8-14.
- 2) 相川 充(1988).援助に対する被援助者の認知的反応に関する研究:心理的負債の決定因に関する研究. *宮崎大学教育学部紀要 社会科学*, **63**, 37-48.
- 3) Barlett, M., & DeSteno, D.(2006). Gratitude and prosocial behavior: Helping when it costs you. *Psychological Science*, **17**, 319-325.
- 4) De Cooke, P.A.(1992). Children's understanding of indebtedness as a feature of reciprocal help between peers. *Developmental Psychology*, **28**, 948-954.
- 5) De Cooke, P.A.(1997). Children's perceptions of indebtedness:The help-seekers perspective. *International Journal of Behavioral Development*, **20**, 699-713.
- 6) Eisenberger, R., Cotterell, N. & Marvel, J.(1987). Reciprocation ideology. *Journal of personality and social psychology*, **53**, 743-750.
- 7) 藤原健志・村上達也・西村多久磨・濱口佳和・櫻井茂男(2013). 小学生における感謝生起状況とその表明についての探索的研究 *発達臨床心理学研究*, **24**, 19-26.
- 8) Gouldner, A. W.(1960). The norm of reciprocity: A preliminary statement. *American Sociological Review*, **25**, 161-178.
- 9) Greenberg, M. S.(1980). A theory of indebtedness. In Gergen, K. Greenberg, M. S., & Willis, R.H. (Eds.), *Social exchange : Advances in theory and research*. New York: Plenum Press. pp.2-26.
- 10) 一言英文・新谷 優・松見淳子(2008). 自己の利益と他者のコストー心理的負債の日米間比較の研究ー *感情心理学研究*, **16**, 3-24.
- 11) 本多明生(2007). ポジティブ心理学における研究動向-感謝心の実証的研究について- *いわき明星大学大学院人文学研究科紀要*, **5**, 42 - 49.
- 12) 蔵永 瞳・樋口匡貴(2012).感謝生起状況の種類-感情体験の違いによる分類- *広島大学大学院教育学研究紀要 第三部*, **61**, 137-142.
- 13) Lohmann, H., Tomasello, M.(2003). The role of language in the development of false belief understanding: A training study. *Child Development*, **74**, 1130-1144.
- 14) Markel, C., Major, A., Pelletier, J.(2013). Relations among children's theory of mind, family factors, language development, and story comprehension in L1 and L2 preschoolers. *International Journal of Research Studies in Psychology*, **2**, 15-32.
- 15) McCullough, M. E., Kilpatrick, S. D., Emmons, R. A., & Larson, D. B.(2001). Is gratitude a moral effect ? *Psychological Bulletin*, **127**, 249-266.
- 16) Milligan, K., Astigton, J. W., Dack, L. A.(2007). Language and theory of mind: Meta-analysis of the

- relation between language ability and false-belief understanding. *Child Development*, **78**, 622-646.
- 17) 森野美央(2005). 幼児期における心の理論発達の個人差, 感情理解発達の個人差, 及び仲間との相互作用の関連. *発達心理学研究*, **16**, 36-45.
- 18) Premack, D., & Woodruff, G.(1978). Dose the chimpanzee have a theory of mind? *the Behavioral and Brain Sciences*, **1**, 515-526.
- 19) Tsang, J.(2006). The effect of helper intention on gratitude and indebtedness. *Motiv Emot*, **30**, 199-205.
- 20) Tsang, J.(2007). Gratitude for small and large favors.: A behavioral test. *The Journal of Positive Psychology*, **2**, 157-167.
- 21) 上野一彦・名越斉子・小貫 悟(2008). PVT-R会が語彙発達検査手引き 日本文化科学社.
- 22) 泉井みずき(2008). 幼児にとっての被援助と不快感情: 幼児期の心理的負債の大きさに影響する要因の検討. *発達研究*, **22**, 59-70.
- 23) 泉井みずき(2009). 幼児期からの被援助時の不快感情の発達:いつから助けられることに不快感情を感じるのか. *東京学芸大学学校教育学研究論集*, **20**, 1-15.
- 24) Weiner, B., & Graham, S.(1988). Understanding the motivational role of affect: Life-span research from an attributional perspective. *Cognition and Emotion*, **3**, 401-419.
- 25) Wellman, H. M., Cross, D., & Watson, J.(2001). Meta-Analysis of Theory-of-Mind Development: The Truth about False Belief. *Child Development*, **72**, 655-684.
- 26) Wimmer, H., & Perner, J.(1983). Beliefs about beliefs: Representation and constraining function of wrong beliefs in young children's understanding of deception. *Cognition*, **13**, 103-128.

## 謝 辞

本調査を行うにあたりご協力いただいた認定こども園のお子様, 先生方, および本調査に調査者として参加してくれた研究室の学生に感謝いたします。また, 多くの貴重なご助言をいただいた筑波大学大学院の村上達也先生にも合わせて心より感謝申し上げます。

## 付 記

本調査の実施あたり, 田園調布学園大学倫理委員会より調査実施の承認を受けた(13-004)。